
ゆきんこ、ひとしずく、

白坂 ゆのる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆきんこ、ひとしづく、

【コード】

N9416E

【作者名】

白坂 ゆのる

【あらすじ】

ゆきんこを捕まえたら、ねがいごとがひとつかなう。ぼくの願いは……。

ゆきんこが、飛んでいる。

つかまえるとながいがいごとがひとつ、かなうのだという。

ぼくはそっと、そっとその羽根を手の中に収めていく。

「ぼくは、今でも君を愛している」

リンクと同じ、白銀色にそまった空をみてから、ぼくはひとつ、身震いをした。

「あのね、あのね、あのねこうちゃん」

スケート靴の底にある、なまえも知らない銀色のすべるやつを、氷のリンクにかつかつとぶつけながら、舌足らずな口調できみはぼくを呼ぶ。

「なに」

ぼくが応じると、きみはにっと笑って、

「肉まん、たべる？」

と、その小さな手のひらにちょこんと肉まんをのせて、ぼくに差し出した。

いつ買ってきたのだろうか。

いつでもぼくの知らない間に、ちょこまかと動き回る幼いきみに、抱きしめたくなくなるくらいの愛しさを感じながら、ぼくはその肉まんを受け取った。

そしてありがとう、といいながらうさぎのニット帽に覆われた頭をなでる。

するときみはさぞかしうれしそうに、ぼくのひとみを見つめていた。

どんだんひとがまばらになっていく。

その中で、ぼくたちは隣り合って肉まんを食べた。

となりを見れば、そこにはおいしそうに肉まんを頬張るきみがいて、手を見ればそこには君の手が、ぼくの手が、確かにやわらかく重なり合っていた。

世界は白銀色に、ぼくたちを祝福してくれているように。幸せな錯覚だ。

でも、ぼくはきつとなにかを忘れている。

さつきから消えない、消えない何か。

たしかに大きなつめあとを、それは残していったはずなのに。

「こごちゃん」

世界は、赤く、銀色との混色を。

きみはただまっしろに、雪のように。

「雪がね、ふってるの」

ぼくの吐く息は白いのに、きみの吐く息だけは透明だ。

「ごめんね」

ぼくはなにもしゃべることができない。

「もっと、いつしよにいたかった」

じゃあいてくれよ。ぼくも連れていってくれよ。君の世界へ。

「もっといつしよに、肉まんはんぶんこしたかった」

これからすればいいじゃないか。

だから、どこにも行かないでくれ。

ぼくはしろいしあわせを、確かにつかまえたじゃないか。

きみはぼくのくちびるにひとさしゆびを置いた。

笑っているのか、泣いているのか、わからないような顔で。

「ねがいごとはね、ずっとは続かないんだよ」

ああ、雪が、雪がきえていく。なくなっていく。

「だいすきだったよ」

ぼくは、今でも君を愛している。

．．．

ぼくは今でも、きみを愛している

君はもう、どこにもいないと知っていながら。

この頬に残る、君がこぼしたひとしずく。

その温かさだけが、ほんとうに確かな真実だと信じて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9416e/>

ゆきんこ、ひとしずく、

2010年12月27日09時40分発行